

「citizens」という言葉が用いられている。しかし上の引用においてスリーターらが「アメリカの……歴史」と表現するように、また多文化教育の実践的理論家であるジェイムズ・バンクスが「多文化教育は、この国の将来の市民すべてが21世紀を生き抜くために必要な知識や態度、スキルを獲得するために必要である。それは国民の存亡に関わっているといっても良い」⁶⁰と述べるように、多くの多文化主義者たちもやはり多文化教育を、「ナショナルな枠組み」に基づいた市民育成の手段として構想しているのである。

1980年に連邦教育省が設立され、公教育の力の淵源が国家という社会制度にあるとされていく中で、この構想は自然なのかも知れない。またそもそも多文化主義に基づく歴史教育者たちが採用する「革新的語り」も、「国民的語り」から派生してきたものであった。国民国家論の分野ではナショナリズムという観念を性質の違いによって大きく2つの段階に分けて考え、〈国民という単位で世界を分断して認識するその認識そのもの〉を第1次ナショナリズムとして、また〈自らが属する特定の国民を尊重する観念および運動〉を第2次ナショナリズムとして捉えるが⁶¹、ここでアメリカの多文化主義者たちが第1次ナショナリズムを発想の前提にしていることに留意することは重要である。以下、この点に注意しつつ歴史教科書の内容を検討する。

3. 歴史教科書における多文化主義の進展

1980年代の政治レベルでの多文化主義批判は「国家の分裂」を問題としたが、他方で多文化化は1965年の移民法改定後の社会において不可避免的に進行しており、歴史教科書からマイノリティに関する情報を消し去ることは現実的ではなかった。その代わり、歴史教科書に登場するマイノリティはアメリカ国家に貢献した存在として描かれるようになる。

このことの端的な例として、第二次世界大戦中の日系アメリカ人についての歴史記述を挙げることができる。1970年代までの教科書では、1世も2世も、彼らが日系であるという理由で一括されてアメリカ国民の定義から排除されていた。しかし1980年代教科書ではたとえば、「[[収容所への] 移動を強制されたこれらの人びとの3分の2はアメリカ国民であった。彼らは自らの国で囚人となったのである」⁶²というように、1世と2世の間に線が引かれることになる。2世が市民権を有すること、英語を話せること、日本国を見たことすらないことなどが強調

され、2世と1世の異質性が繰り返される。1980年代教科書はそのようにして日系人の中から国民の構成員をより分け、同時に彼らの忠国の精神を強調する。「第442連隊戦闘部隊」「第100歩兵大隊」といった具体的な部隊名を紹介し、「この戦闘部隊の隊員たちの戦いぶりは、勇敢さと向こう見ずな英雄的行動を伴うものであり、それは彼らの決死のスローガン『当たって砕けろ』に約言されていた」⁶³と解説する。かつて十全な権利の保障から締め出されていた日系人は、1980年代の教科書において国家の利益に直結する忠誠心や勇敢さを強調されることで、初めてアメリカ国民の内部に位置づけられることになったのである。

さらにこの「合衆国へのマイノリティの貢献」は国民史叙述の前提として1990年代の教科書にも継承されていく。たとえばボストン虐殺事件でイギリス軍に銃殺されたクリスパス・アタックスは1980年代の教科書に頻出したが、1990年代教科書では「アフリカ系アメリカ人とネイティブアメリカ人の祖先をもつ水夫」⁶⁴としてボストンでのその死が詳述される。イギリス軍へのスパイ行為を行ったヴァージニアの奴隷ジェームズ・アーミステッド・ラファイエットは、その「功績」が認められて州議会から自由を与えられたとされる⁶⁵。独立戦争時の「黒人連隊」⁶⁶や「黒人兵士の勇敢さ」⁶⁷も強調されて、黒人の存在感は独立革命の像の中に浸透した。

その意味では、1980～90年代の教科書でいわれる「国民」とは、白人のみが中心を占めていた1950年代までのそれそのものとはやはり異なるものである⁶⁸。そして1980年代に国民概念のマージナルラインが引き直されたことにより、1990年代には歴史を叙述する教科書の視点が複数化していく。たとえば独立戦争の記述において、アフリカ系アメリカ人自身の視点と判断が次のように説明される。

革命の勃発時、奴隷たちはジレンマに直面した。終身的隷属状態から抜け出すという彼らの目的をどのように追求することが最善であろうか？ 彼らの白人の主人たちと共に戦うべきであろうか？ それとも彼らに対して戦うべきであろうか？ 正しい選択というものがあるがすぐには明白にならないまま、アフリカ系アメリカ人たちは様々に異なった決定を下した⁶⁹。

ここでは、過去を国民社会の中心に位置する人びとの立場から把握する一元的な視点は採用されていない。アフリカ系アメリカ人の視点が採用されることによ